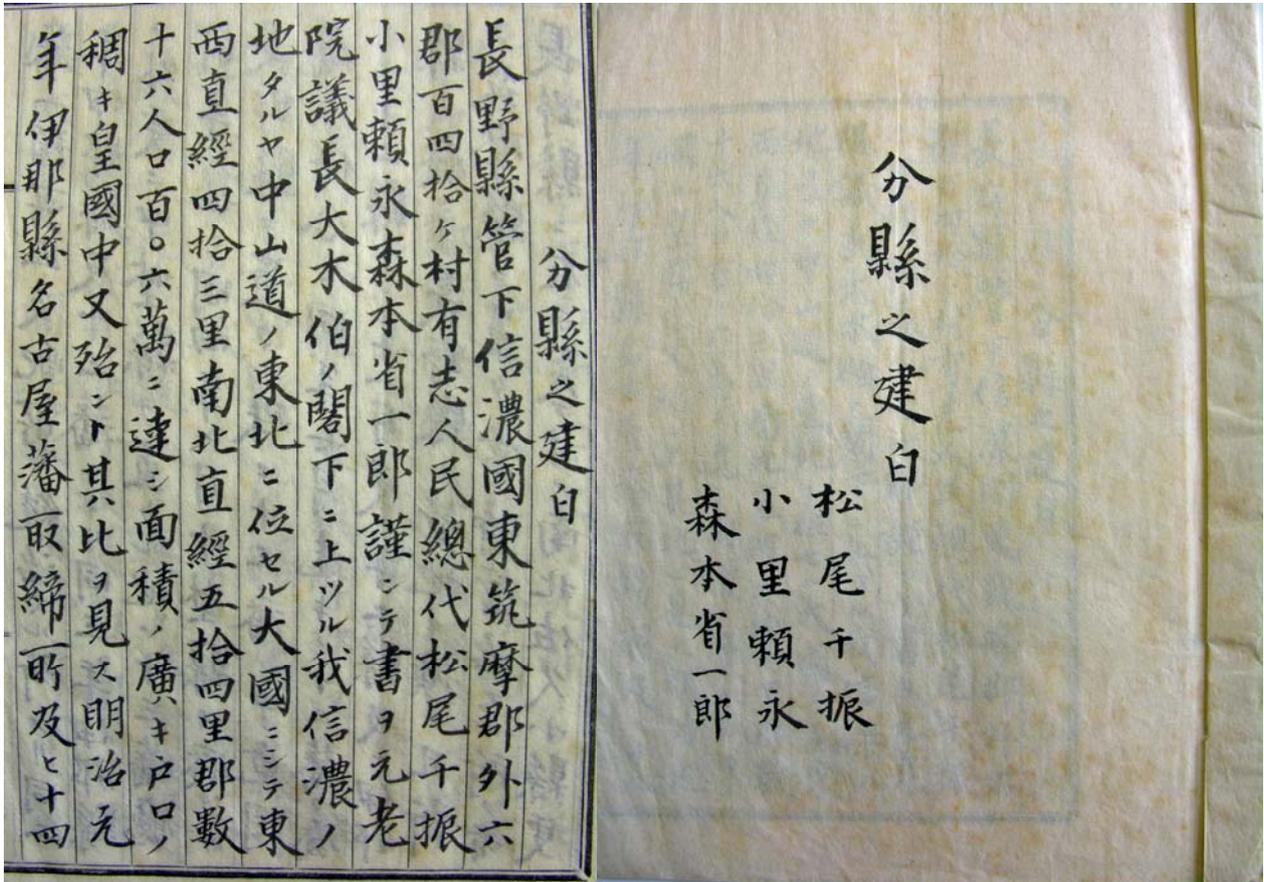


10-1 小里頼永(分県・移庁論)ガイド

小里頼永の在職中の主な活動・・・分県・移庁論

県庁移庁論・・・南信一市七郡市町村長と出身県会議員によって移庁期成同盟会を結成

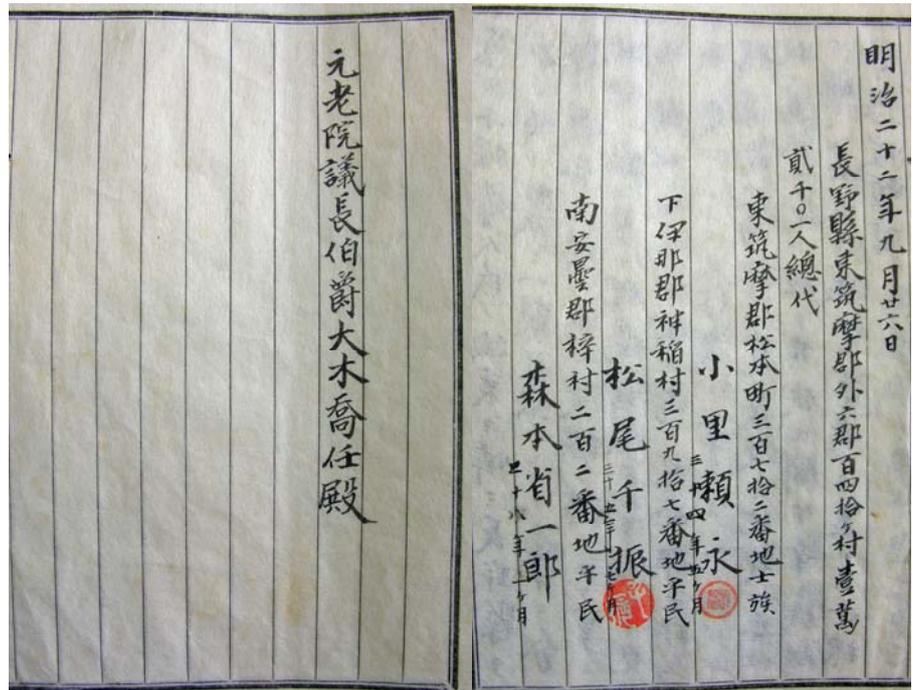
小里の政治生活は明治初年の分県問題・移庁論で始まり、のちの分県・移庁問題で終わる観がある。その陣頭指揮をとった。



元老院議長伯爵 大木喬仕に宛てた小里頼永らの分県建白書（明治22年9月26日）の一部分。

○東筑摩郡外6郡140ヶ村12001人総代として小里・松尾・森本の3名の連署となっている。

- ・明治9年（1876）に長野県に合併されたが、15年にはやくも分県論が出てきた。県会議員市川量造等が分県実行委員として、大野誠県令に、飛騨国を加えた筑摩県復活を迫った。この時は、途中で進展しなくなる。明治21年（1888）11月に、県会に松本・



上田を候補とする県庁移転建議書が提出された。この移庁論も失敗に終り、続いて分県運動が台頭した。

- ・明治21年12月、県会終了後、松本町青龍寺（現全久院）で、下伊那の県議も含めて、筑摩県再建のための請願の議決がなされた。12月末には**降旗元太郎**、**小里頼永**は上京して、分県運動について実現めざして計画を推し進めた。
- ・明治22年（1889）2月2日、**南部七郡大懇談会**が、松本神道分局公会所に二千余名の参加をもって開かれ、分県請願事務委員総代降旗元太郎がそれまでの経過を報告した。
- ・翌日小里、降旗等は飯島村で上下伊那懇談会を開いた。
- ・明治22年9月26日、**小里**、**南安曇郡の森本省一郎**、**下伊那郡の松尾千振の3人**は、1万2千人余の総代として県庁を訪れ、内務省へ請願書提出のための県知事添書を申請した。知事木梨精一郎は請願書を戻したため、小里等は直ちに上京、松本に一県をおくという請願書を内務省に提出したが、受理されなかった。元老院への建白は受理された。
- ・10月には上下伊那町村有志による非分県推進書が県会に提出されている。県もまた分県には反対であった。
- ・元老院では、筑摩県再置に賛成し、議員46名中38名の多数で、その建白を認める決議をした。しかし、内務省が分県に反対したため、分県は実現できなかった。
- ・明治23年（1890）12月長野県会において再び移庁運動が再燃する。12月3日、長野町の県庁を不適当とし、松本・上田に置く事を適当とする移庁建議書が降旗、折井庄司によって提出された。反対派は強行採決をし、移庁建議書は提案者不在で取り上げず、その他地方税予算案まで可決して県会を閉会とした。異例のこの強行採決を県は正当とし、知事内海忠勝に報告し、知事も認めた。上田にいた移庁派議員は、代表を上京させ、県会決議無効の運動をした。
- ・明治24年（1891）2月には、署名を集め、知事に県会決議取消請求書を提出したが拒絶された。
- ・県会での強行採決は、以後、松本町、島立村の納税拒否問題、松本騒擾（そうじょう）事件を生み、知事公選論を生み、また、松本町の市制施行にも影響を及ぼした。（施行が遅れた）

{分縣之建白} 大要

- ① 北部は北より東に延びて上水内郡以下8郡を包含して、南部は西より南に東筑摩郡以下六郡を含有する。南北両部が分かれるのは自然によるもので、その間は断絶、乖離（かいり：離れ離れの意）の状態ではあるが、深く疑問におもうことでもない。
- ② 県会をみるに創始以来南北両部議員の思想常に一致していない。決議は公平ではない。これは人情の違いによる。決議も紛れ、事業もできない。これは県民の不幸である。県会ですらこのような傾きがある。ましてや人民の動向は推して知るべしだ。
- ③ 県庁の位置が偏っている。南部人民は県庁に行くのに近い者で1日、遠い者は5日ほどかかる。北部の道路は平坦で鉄道はすでに東より北に通じている。南部人民は涙を呑んで辺陬に往来している。その不便どうしてだろうか。
- ④ 県庁に近き者はその助けや誘いを受けやすく、遠い者は保護感化にあいにくく、南北の間に事業の隔たりが生ずる。事業をした所をみると歎き憤る者もいる。
- ⑤ 北部は収穫が高く、南部は慨して反対である。地価の一点に基いて平均をとれば南北隔絶の差少しといえども得する者ある。同一治下でその負担を受けることはできない。

南部7郡の情勢を察して、長野県を割って、時に松本に一県を置くことに分県の命を得れば、人民は矛盾を生ず、自治の精神によって南部人民は榮える。信濃の幸ともなる。信濃南北両部一覽表、地図、委任状の写本をそえて、謹んで採納をお願いするものである。

小里頼永の政治生活は明治初年の分県問題・移庁論で始まり、県会議員や町長・市長の活動の中で、県庁移庁論が生きていて、中南進7郡の市町村長と出身県会議員らと移庁期成同盟会が結成され、その陣頭指揮をとった。彼の政治的バックボーンのひとつとなって市長時における活動の礎となっているといっても過言ではない。